

K-688

花ノ木遺跡

発掘調査報告書

2001

河北町教育委員会

花ノ木遺跡

発掘調査報告書

平成13年3月

河北町教育委員会

序

本書は、花ノ木工業団地造成工事に伴い、平成9年度と10年度の2か年にわたり、河北町教育委員会が実施した「花ノ木遺跡」の発掘調査の結果をまとめたものです。

花ノ木地区は河北町の北部に位置し、法師川から緩やかな傾斜面になっており、その中を国道347号が走っております。『山形県遺跡地図』(昭和53年 山形県教育委員会)にも「花ノ木遺跡」として登録され、古くからよく知られた遺跡であり、昭和31年、34年の発掘調査と35年の開田作業中の遺物の発見によって、縄文時代晚期から弥生時代初頭の遺跡であることが確認されました。しかしながら、その際に正式な調査報告書は出されませんでした。

平成4年の範囲確認の試掘調査では、団地造成計画地までは包含されないとされていましたが、団地造成工事が進んでいく中、造成地域内から遺物の出土が確認されたことから、平成9年に文化財保護の立場から河北町埋蔵文化財調査委員会を組織し、緊急発掘調査を実施することになりました。

河北町は山形盆地の一角にあり、最上川と寒河江川に囲まれ、町の北部には「花ノ木遺跡」をはじめとする多くの縄文時代の遺跡が存在し、古代の集落が数多く点在しており、豊かな自然に恵まれた生活環境にあったと思われます。

「花ノ木遺跡」は、出土した土器や遺構から、縄文・弥生時代が接触した文化がみられる貴重な遺跡であり、その近くからは石刀・石包丁・石斧など稲作に用いられたと考えられる石器類も発見されています。

近年、開発事業が進むにつれて、埋蔵文化財の保護の観点から、その調整について難しさが増してくると思われますが、先人の文化に触ることは、ロマンの追求であり、河北町は“歴史と文化の薫るまち”として、今後も先人が残したこれらの遺産の保護に努めて参ります。

最後になりましたが、この調査に当たりご指導ご協力を賜りました関係機関及び関係各位に心より厚くお礼申し上げます。

平成13年3月

河北町教育委員会
教育長 後藤貞義

例　　言

- 1 本書は、花ノ木工業団地造成工事に係る「花ノ木遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、平成9年度、平成10年度の2か年にわたり実施した。現地調査期間は以下のとおりである。

平成9年度調査 平成9年7月28日～平成9年12月11日

平成10年度調査 平成10年4月20日～平成10年10月28日

- 3 調査の要項は下記のとおりである。

遺跡名 花ノ木遺跡 遺跡番号448

所在地 山形県西村山郡河北町大字吉田字花ノ木

調査主体 河北町教育委員会

調査体制 河北町埋蔵文化財調査委員会

委員長 菊地隆三（河北町文化財保護審議会会長）

副委員長 横 清哉（河北町文化財保護審議会副会長）

副委員長 北畠教爾（河北町文化財保護審議会委員）

委員 高橋郁夫（日本考古学協会会員）（主任調査員）

委員 宇野修平（日本考古学協会会員）

委員 浅黄喜悦（河北町文化財保護審議会委員）

委員 長南憲一（山形考古学会会員）（調査員）

委員 建部真也（学識経験者）（調査員）

調査協力員

奥山良三、藤野八重、茨木とよ子、軽部信一、深瀬順子、庄司栄一、

門脇正孝、阿部利春、奥山ヒデ、長谷川義子、丹野恵美子、

(社)河北町シルバー人材センター会員のみなさん

調査補助員

今田史明（河北町教育委員会社会教育課文化財係主事）

事務局

河北町教育委員会社会教育課

社会教育課長 後藤金也（H9年度）

タ 阿部大策（H10年度）

タ 和田富男（H11年度）

タ 日下部利男（H12年度）

課長補佐兼文化財係長 斎藤文夫（～H11年度）

文化財係長 阿部葉子（H12年度）

文化財係主事 今田史明（H9年度～）

- 4 本調査にあたっては、次の方々よりご指導・ご協力をいただいた。記して感謝申し上げる。

山形県教育庁文化財課、財團法人山形県埋蔵文化財センター、川崎利夫、
(社)河北町シルバー人材センター、河北町土地開発公社

(順不同、敬称略)

- 5 本報告書の作成・編集は作業員・事務局員の協力を得ながら、今田史明及び河北町埋蔵文化財調査委員会が担当した。

- 6 出土遺物、調査記録類については、河北町教育委員会が一括保管している。

凡　例

- 1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は次のとおりである。

S K . . . 土壙	S T . . . 壺穴住居跡	S B . . . 掘立柱建物跡
S D . . . 溝跡	E P . . . 遺構内柱穴	S P . . . ピット
E L . . . カマド	R P . . . 土器・土製品	R Q . . . 石器・石製品
S . . . 石		

- 2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。

- 3 報告書執筆の基準は次のとおりである。

- (1) 遺構・遺物実測図は、各挿図毎にスケールを付した。
- (2) 遺物図版については、1/3の縮尺を基本としたが、一部については任意の縮尺である。
- (3) 遺物は抽出した主なものだけを掲載した。また、縄文時代の土器及び石器については写真と表のみの掲載とした。

目 次

I 調査の経緯	1
1 発掘調査に至るまでの経緯	1
2 調査の経過	1
II 遺跡の概観	4
1 遺跡の立地と環境	4
2 遺跡の層序	5
III 検出された遺構	9
1 遺構の分布	9
2 積穴住居跡 (S T)	9
3 掘立柱建物跡 (S B)	17
4 土壙 (S K)	18
5 溝跡 (S D)	18
IV 出土した遺物	21
1 縄文土器	21
2 弥生土器	21
3 古代の遺物	21
4 土偶・土製品	21
5 小玉及びその他の出土遺物	21
6 石器・石製品	22
V まとめ	31
報告書抄録	32

表目次

表-1 出土遺物一覧表 (1)	27
表-2 出土遺物一覧表 (2)	28
表-3 石器・石製品一覧表	29

挿図目次

第1図 遺跡位置図	3
第2図 遺跡層序断面図	5
第3図 調査区概要図	6
第4図 遺構配置図	7
第5図 S T 1 3 6 1、E L 9 9 7 住居跡	10
第6図 S T 1 1 7 3 堅穴住居跡	12
第7図 S T 1 0 5 堅穴住居跡	13
第8図 S T 3 8 0 堅穴住居跡	13
第9図 S T 1 3 0 堅穴住居跡	14
第10図 S T 1 0 6 0 堅穴住居跡	15
第11図 S T 1 2 4 1 堅穴住居跡	16
第12図 S B 1 3 5 8 挖立柱建物跡	17
第13図 S K 2 8 土壌	19
第14図 S K 1 4 7 土壌	19
第15図 墓塚群土壤	20
第16図 S T 1 2 4 1 出土遺物	23
第17図 S T 1 2 4 1、S T 1 1 7 3 出土遺物	24
第18図 S T 1 2 4 1、S T 1 0 5 出土遺物	25
第19図 S T 1 0 6 0、S T 3 8 0、S T 1 3 0、S T 1 0 5 出土遺物	26

図版目次

図版 調査状況	2	図版 8 出土遺物 繩文
図版 調査区遠景	4	図版 9 出土遺物 繩文
図版 1 調査状況・遺構検出状況		図版 10 出土遺物 古代
図版 2 遺構精査状況		図版 11 出土遺物 古代
図版 3 遺構精査・遺物出土状況		図版 12 出土遺物 古代
図版 4 遺構精査・遺物出土状況		図版 13 出土遺物 石器
図版 5 出土遺物 繩文		図版 14 平成8年度発掘調査出土遺物(1)
図版 6 出土遺物 繩文		図版 15 平成8年度発掘調査出土遺物(2)
図版 7 出土遺物 繩文		図版 16 平成8年度発掘調査出土遺物(3)

I 調査の経緯

1 発掘調査に至るまでの経緯

花ノ木遺跡は、昭和31年と昭和34年に、山形大学の柏倉亮吉教授を中心として発掘調査が行われた。河北町周辺の遺跡など考古学の研究に熱心であった後藤三朗氏らも参加して行われ、縄文時代晚期から弥生時代初頭の遺跡であることが確認された。出土した遺物など花ノ木遺跡については、後藤氏の『河北町及び周辺の原始文化』(1957年刊)に紹介されているが、正式な調査報告書は出されなかった。

平成4年には、花ノ木工業団地造成工事に伴い、遺跡の範囲確認のための試掘調査が行われた。その結果、遺跡は昭和30年代に調査した範囲よりも少し広がるとしたが、団地造成地までには広がらないのでないかと推定するに至った。

しかし、造成工事が進んでいく中、平成8年6月に、造成地域より遺物の出土があることが確認され、緊急に発掘調査を実施することになった。その結果、多くの遺物が出土した。さらに、遺物の範囲を確認するためのトレーナー掘り、同年11月には1m×1mの試掘区54箇所を掘る試掘調査を実施した。その結果をもとに、遺跡予想範囲を調査区として設定し、平成9年より緊急の発掘調査を実施することになった。河北町教育委員会では、文化財保護の立場から、より良い調査が進むように河北町埋蔵文化財調査委員会を組織し、記録保存を目的とした緊急発掘調査となったものである。

2 調査の経過

調査は平成9年度と10年度の2か年にわたり、約2,900m²を調査対象としている。調査区を含めた地域に4mを単位とするグリッド(G・方眼状の地区割り)を設定し、地点の高さを記録するための基準点を設けた。グリッドを構成するX軸、Y軸の交点には、目印となる杭を打込み番号をつけた。また、調査区の北半部、南半部のそれぞれに東西、南北に交差する土層観察用のベルトを設定し、調査区を区割りした。

平成9年度の調査は、Y=30グリッドまでの調査となった。7月17日から準備作業に入り、7月28日に現場での調査を開始した。重機で耕作土などの表土を取り除き、グリッドの交点に杭を打ち記録の目印とした。それから人力で地面を少しずつ掘り下げる作業(面整理)を何回も繰り返しながら、土の質や色合いの変化を手掛かりに遺構を検出する作業(遺構検出)を行った。遺構は黄褐色の地山の土に暗褐色や褐色などの土で残されている。こうして検出された遺構に番号を付け、検出地点、配置、高さなどを図面などに記録した。その後、遺構の半分、または中央にベルトを残して、どのように土が堆積しているかを観察しながら慎重に掘り下げ、図面などに記録した。記録は図面だけでなく、常に写真撮影も行った。このような作業で出土した遺物は、記録しながらグリッドや遺構毎に取り上げ、重要なものについては番号を付けて取り上げた。

11月18日には、調査の成果として調査説明会を現地で開催して多くの参加者を得た。

現地の調査は、記録などの作業や遺跡範囲確認のトレンチ掘りを続けながら、12月11日で終了し、同日に器材撤収を行った。

平成10年度は、9年度の調査との連続性をもたせるためグリッドを構成するX軸、Y軸をそれぞれ南方に拡張するように設定し、交点に杭を打ち番号を付けた。4月8日から現場での作業（準備作業）を開始し、4月20日には安全祈願式を行い現地調査を開始した。現場においては、浸水や暗渠埋設に注意をはらいながら表土を剥ぎ、面整理、遺構検出、遺構精査、記録などの作業を進めた。

水が湧きでたり、大小の礫が広くあつたりして作業に困難な部分もあり時間を要したが、調査の成果を地元の方々や関係者に知っていただくために、9月29日に調査説明会を現地で開催した。

その後、遺構精査や遺物の取り上げ、記録等の作業を続けて、10月28日に現地の調査を終了した。



表土除去



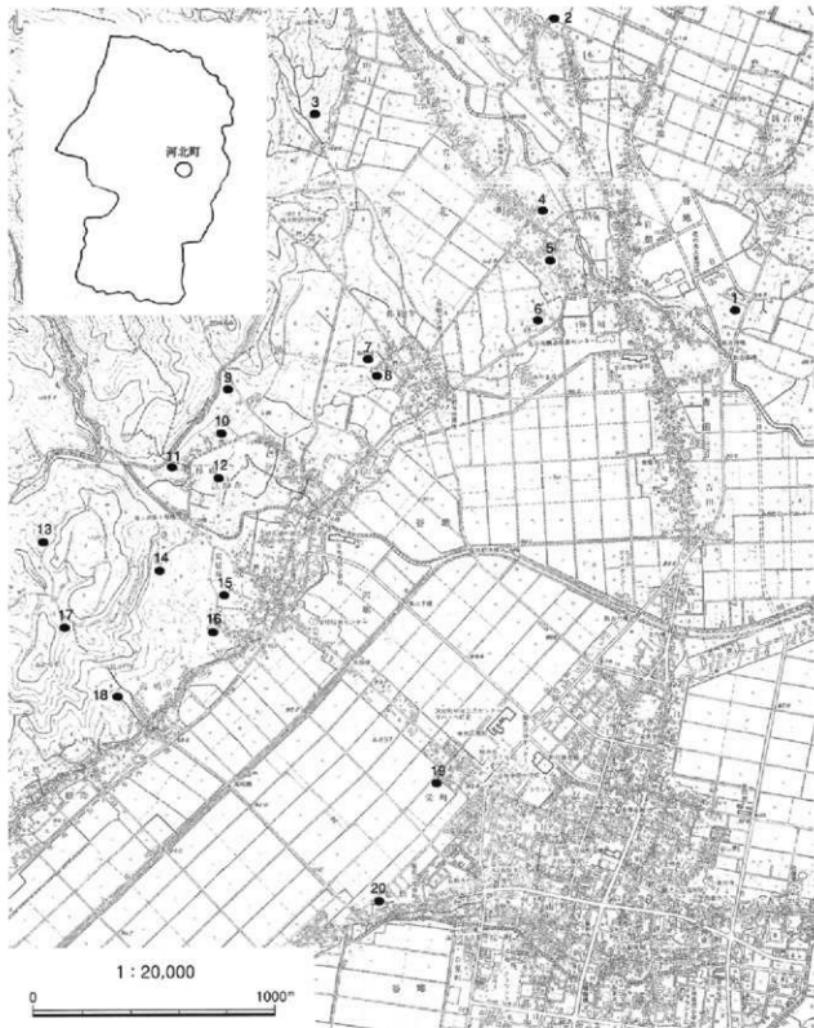
面整理



遺構精査



記録作業



- | | | |
|------------------|------------------|-------------------|
| 1 花ノ木遺跡（縄文晩期・弥生） | 8 弥勒寺経塚遺跡（室町） | 15 お月山遺跡（縄文中期・奈良） |
| 2 萩木遺跡（縄文） | 9 山の神遺跡（縄文前期？） | 16 喜々原遺跡（縄文中期・古墳） |
| 3 岩木観音遺跡（縄文） | 10 横林遺跡（縄文） | 17 楼光寺A遺跡（縄文前・中崩） |
| 4 岩木B遺跡（縄文前・中期） | 11 定林寺跡遺跡（室町～江戸） | 18 足沙門山遺跡（縄文・平安） |
| 5 若木A遺跡（縄文中期） | 12 法師毒薙跡（旧石器・弥生） | 19 所沢遺跡（奈良～平安） |
| 6 四ツ塚遺跡（縄文中期・平安） | 13 鳴鶴岡遺跡（縄文中期） | 20 若宮八幡遺跡（奈良～平安） |
| 7 弥勒堂遺跡（平安） | 14 慶光寺下遺跡（縄文中期？） | |

- | |
|-------------------|
| 15 お月山遺跡（縄文中期・奈良） |
| 16 喜々原遺跡（縄文中期・古墳） |
| 17 楼光寺A遺跡（縄文前・中崩） |
| 18 足沙門山遺跡（縄文・平安） |
| 19 所沢遺跡（奈良～平安） |
| 20 若宮八幡遺跡（奈良～平安） |

第1図 遺跡位置図

II 遺跡の概観

1 遺跡の立地と環境

花ノ木遺跡は、山形県西村郡河北町の北部に位置し、国道347号の東側と谷地より新吉田へと向かう町道の西側に面している。谷地から新吉田へ向かうと、集落へ右折してすぐに法師川にかかる橋があり、緩やかな傾斜面になっている。

河北町の西半は、出羽山地の東の縁にある葉山から延びる低い山地で占められ、東半の平地は、寒河江川のつくった扇状地のほか、法師川、古佐川、滝ノ沢川などが山地から削り取った大量の土砂が厚く積もった扇状地により形成されている。南から北に流れる最上川に区切られるまで一面の平野が広がり、山形盆地の一角をつくっている。

山地から平地に変わると麓に沿い、古くから箕輪、両所、根際、沢畠、弥勒寺、岩木、さら湯野沢、岩野などの集落が形成されてきた。これらの集落の背後は陽当たりが良く、見晴らしの良い丘の上や傾斜面に、縄文時代から古代の遺跡が数多く点在している。

花ノ木遺跡は、法師川が形成した扇状地の扇端近くの微高地に立地している。標高は約90～100mで、法師川の左岸の自然堤防・微高地上に位置し、南東に緩く傾斜している。昔は農作業中に石器や土器片を拾えたと伝えられている。

遺跡の周りは湧水が豊富で、昭和30年代の基盤整備により開田されるまで、遺跡のある微高地を取り巻くように「古田」があり、原始の時代には沼沢地だったと考えられる。水鳥や水を飲みに来る小動物を捕らえ、法師川や最上川で採れる鮭や川魚、近くの山や野から木の実などの食料を探集でき、南、東に開け陽当たりの良い、生活するには良好な場所だったと思われる。縄文時代や弥生時代には恵まれた生活環境にあったと考えられる。



調査区遠景

2 遺跡の層序

全体として法師川や開田事業の影響が大きく、複雑に入り組み搅乱されている部分があり、安定した面を把握しにくいのが実状である。第2図は調査区北半部西ベルトで(26,22)G～(28,22)Gの南側壁の土層を実測したもので、これをもとに遺跡の基本層序を述べる。

第Ⅰ層 褐色砂質土

I a 褐色砂質土

(粒状疊が所々わずかに混じる。下層に薄く赤さびた酸化した根の痕があり、

I b と分かれる。 耕作土・表土)

I b 褐色砂質土

(粒状の疊がわずかに混じる。下層に酸化鉄の赤い色がほんやり見られる。

耕作土・表土)

第Ⅱ層 褐色砂質土

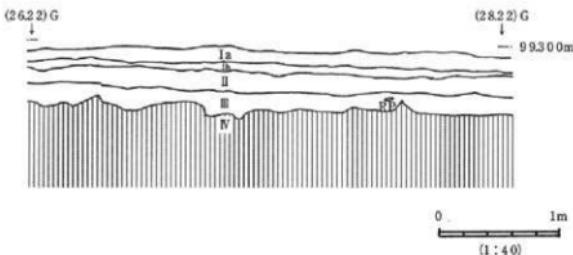
(わずかに黄色い細かい疊が混じる。I層よりやや暗い。 表土)

第Ⅲ層 暗褐色砂質土

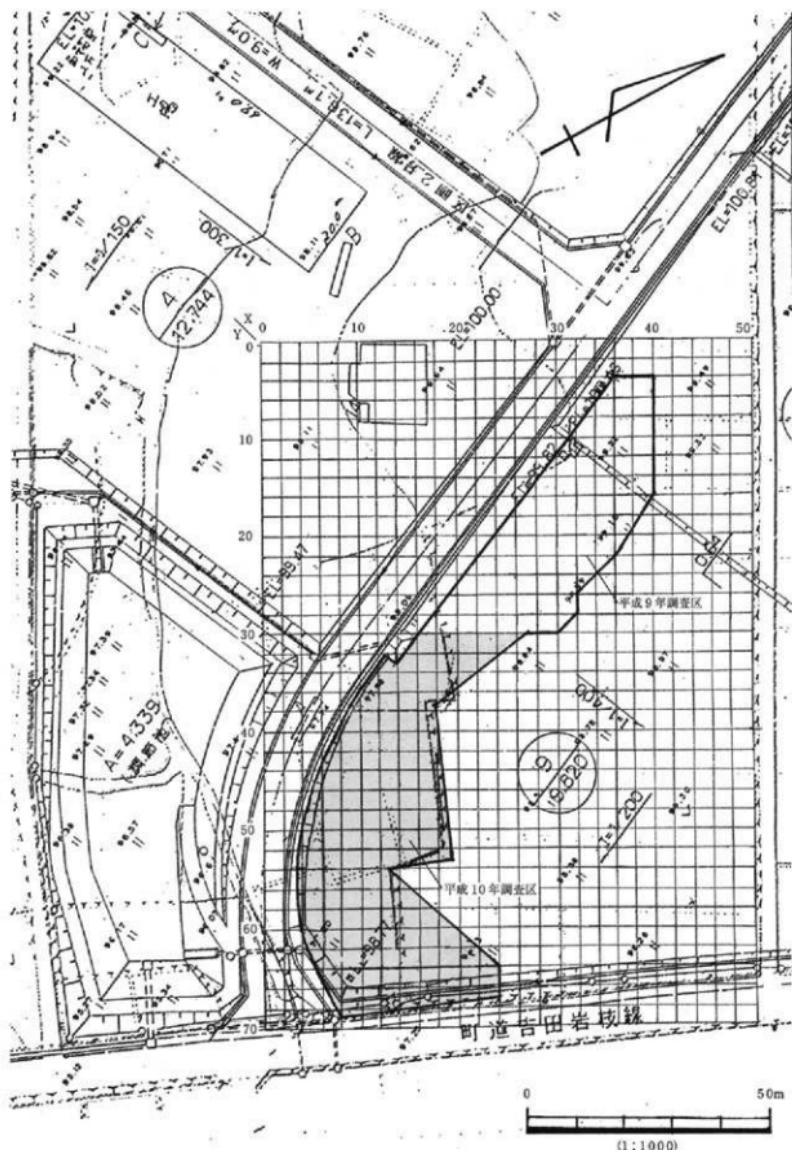
(土器片を含む。 遺物包含層)

第Ⅳ層 黄褐色砂質土

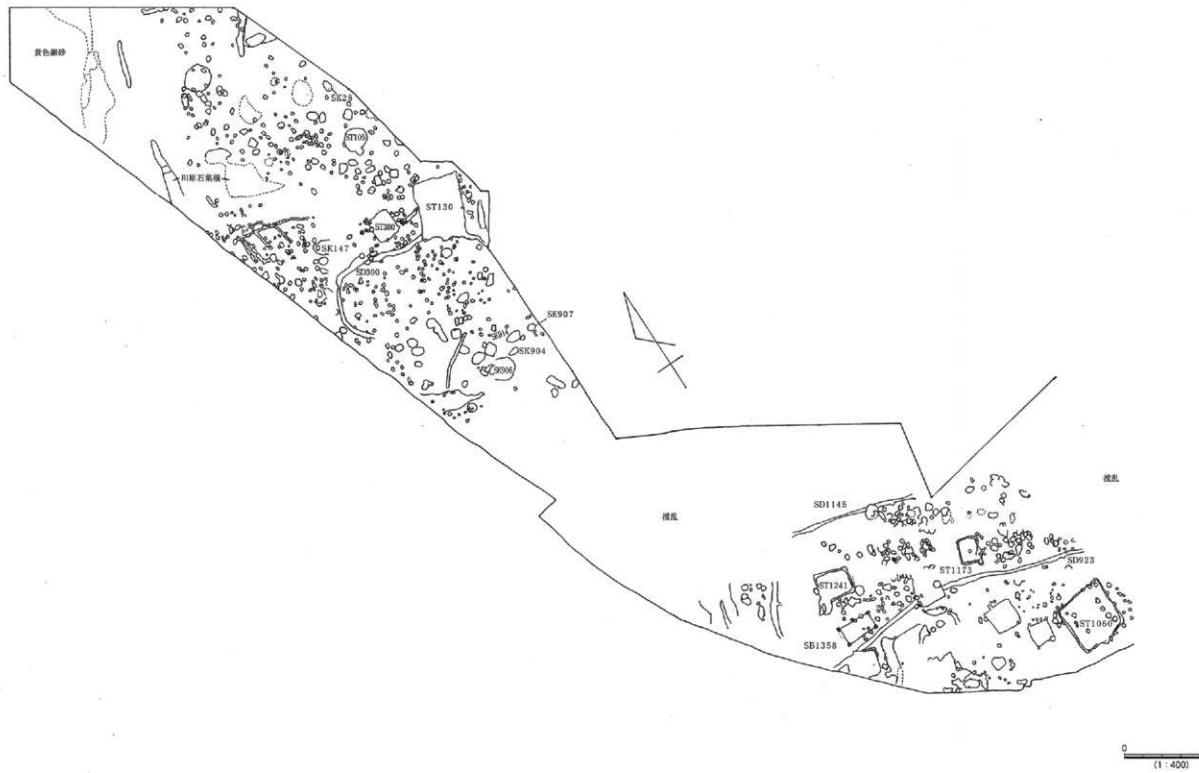
(少し粘性あり。 地山)



第2図 遺跡層序断面図



第3図 調査区概要図



第4図 遺構配置図

III 検出された遺構

1 遺構の分布

今回の調査で発見された主な遺構は、竪穴住居跡（S T）・掘立柱建物跡（S B）・溝跡（S D）・土壙（S K）・墓壙群、柱穴等である。

調査区北端部は黄褐色の砂で覆われ、地表下1mに近い堆積層となっている。また、所々に風化して碎けた黄色の疊岩のまとまりがあったり、河原石の集積があつたりと、土壙・柱穴の検出がみられるものの、明確な遺構を確認することはできない。さらに、今回調査区の中央部分で、微高地から斜面にかけては、包含層が削平され土壤の改変を受けてあつたり、黄褐色粗砂の堆積層があつたりと遺構の検出はできなかった。

安定した面を把握しにくい中でも、北半部と南半部で住居跡が検出された。特に南半部の住居跡はほぼ同一方向に向けられて造られており、ほぼ同時期に存在した古代の住居跡群と考えられる。縄文時代～弥生時代にかけての住居跡については明確には確認されなかつたが、ほぼ円形に配置された石組みの配石遺構を検出した。

グリッドのY=30よりすぐ南で墓壙群を検出した。開田事業の際に上部の大部分を削平され、底部がわずかに残っている状態であったが、小玉が出土し、朱も確認された。他に土器の廐棄壙と思われる土壙など数基を検出した。

また、古代の住居跡により切られていたり、開田・耕作等により搅乱を受けていたりして壊されている場所もあるが、溝跡も検出した。

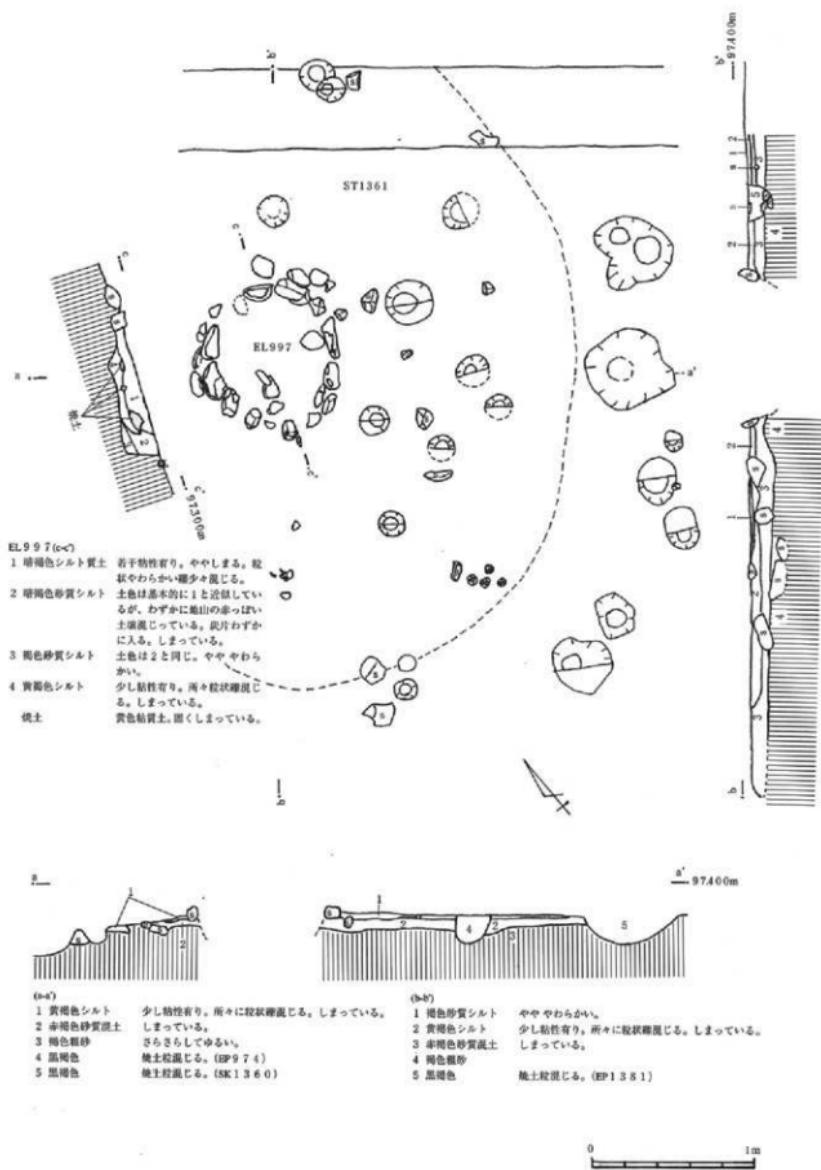
小穴（ピット）は搅乱を比較的受けていない調査区全面に検出されたが、確実に柱穴と思われるようなものは少なかつた。

縄文時代晚期頃の遺構と、古代の遺構が混在して、さらに包含層が動かされている部分があり、安定した遺構面は把握しにくい。

2 竪穴住居跡（S T）

S T 1 3 6 1 • E L 9 9 7 (第5図)

花ノ木遺跡は、以前より縄文時代晚期から弥生時代の遺跡と言われており、今回もその時代の住居跡の検出が期待されていたが、明確な検出には至らなかつた。しかし、出土した遺物等から、その頃の時代と推定される遺構で、ほぼ円形に配置された石組の配石遺構を調査区の南半部（8, 48～50）Gで確認した。この石組を中心として住居跡の範囲・大きさの検出に慎重を期したが、明確な範囲も柱穴も確認するには至らなかつた。平面プラン検出段階で範囲の線を推定して引いてみた。住居内は酸化鉄で赤化した赤褐色砂質土で、わずかに炭や黄褐色ないし赤い焼土を均一に含んでおり、固くはないがしまっていた。住居の外は、酸化鉄を含む赤褐色砂質土で指で押すと表面が一部低くなつた。石組は約80cmの直径の円状に20cm前後の大きさの石が配置されており、黄色粘質土で固くしまっている焼土もみられた。



第5図 ST1361、EL997住居跡

以下は古代の竪穴住居跡の概略を述べる。

S T 1 1 7 3 (第6図)

調査区の南側 (10, 54~56) Gで検出された竪穴住居跡である。平面プランは南北に280cm、東西230cmの大きさである。確認面から床面までの高さは20cm~25cmである。ピットは確認することができなかった。焼土は一部検出したがカマドについては明確には確認できなかった。住居内から赤焼土器の壺や須恵器の壺が出土している。須恵器の壺の一つに、底に墨書で「生」と読める土器が出土した。

S T 1 0 5 (第7図)

調査区の北東 (32, 22) Gで検出された竪穴住居跡である。平面プランは隅丸方形を呈しており、南北に240cm、東西に280cmである。確認面から床面までの高さは約20cmである。ピットとカマドは確認できなかった。住居跡南には土壙が認められた。住居跡覆土からは、須恵器壺体部や赤焼土器底部等を検出した。また、用途不明の鉄製品も出土している。

S T 3 8 0 (第8図)

(28, 24) G杭を位置するところに検出された竪穴住居跡である。平面プランが確認した長さで南北に285cm、東西に260cmの隅丸方形の住居跡である。確認面から床面までの高さは最大で14cmである。ピットとカマドは確認できなかったが、住居の南東隅に火を焚いた跡の焼土が検出された。住居跡覆土からは、硯片や須恵器・赤焼土器の壺の一部が出土している。

S T 1 3 0 (第9図)

S T 3 8 0 の東側方向で検出された。長軸640cm、短軸540cmの大きさの住居跡である。住居内及び壁際にピットが数多く確認されたが、明確に柱穴と思われるものは確認することはできなかった。住居の一部が溝跡を切っていた。南側にはカマドと思われる跡があり、断面を見ると炭化物を多く含んでおり、焼土も部分的にみられる。出土した遺物はほとんどが破片であったが、その中でも須恵器の壺の底部が出土している。

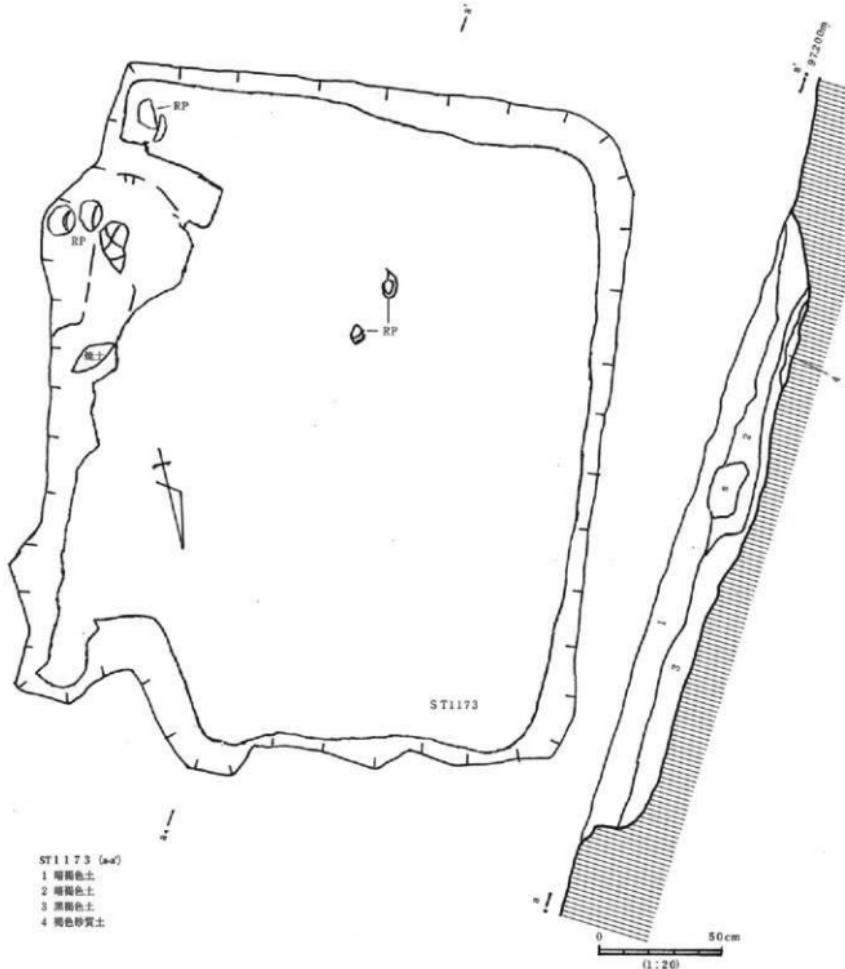
S T 1 0 6 0 (第10図)

調査区の一番南側で、S T 1 1 7 3 とはほぼ同一方向に向けて造られていると思われる竪穴住居跡である。(6~10, 60~64) Gに位置し、南北に580cm、東西に550cmの大きさである。確認面から床面までの高さは10cm~15cmである。床面は褐色粗砂よりわずかに暗くしまっていて、その下面是砂質土の下に礫が均等につまっており、礫の上に平らになるように入れられている。ピットは数個確認されたが、明確な柱穴になるものは不明である。カマドは南側にみられるが、明確な検出とはいかなかった。ただし焼土がみられ、カマドの上から落ちた平らな土がまのようないものを確認した。住居の覆土から須恵器の壺等が出土している。

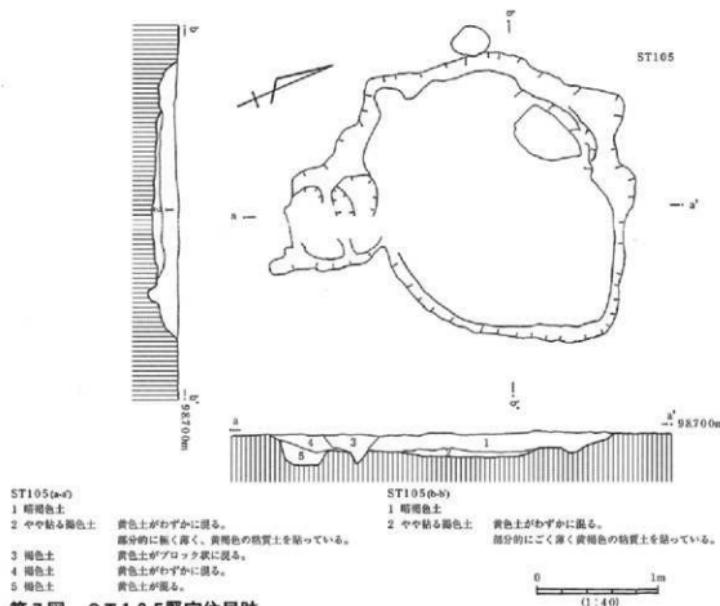
S T 1 2 4 1 (第11図)

調査区の南半部南西側で検出され (8~10, 48) Gに位置する。平面プランは南北

に300cm、東西に360cmの竪穴住居跡である。確認面から床面までの高さは20～25cmである。ピット、柱穴は確認できなかった。床面は水気を含んでおり、地山を掘り下げていくと、水がしみ出てきた。住居跡の南西角にカマド跡が検出され、焼土がまとまった形で確認された。床面からは、土圧で潰れていたが、ほぼ完形の須恵器や赤焼土器の壊が数十点伏せられた状態で出土した。また、木材が表面が炭化した状態で一緒に出土した。



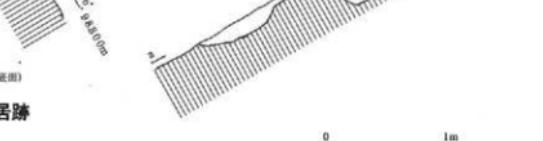
第6図 ST1173竪穴住居跡



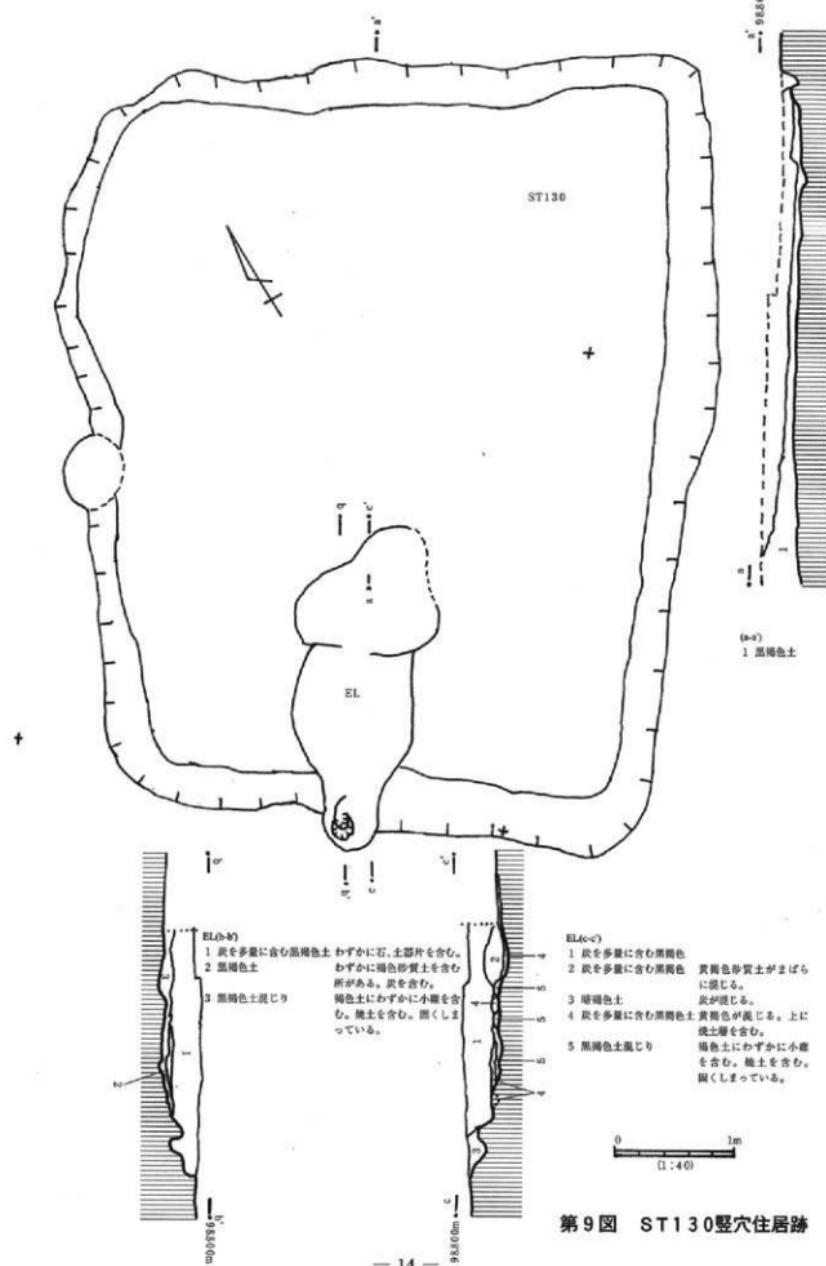
第7図 ST105竪穴住居跡

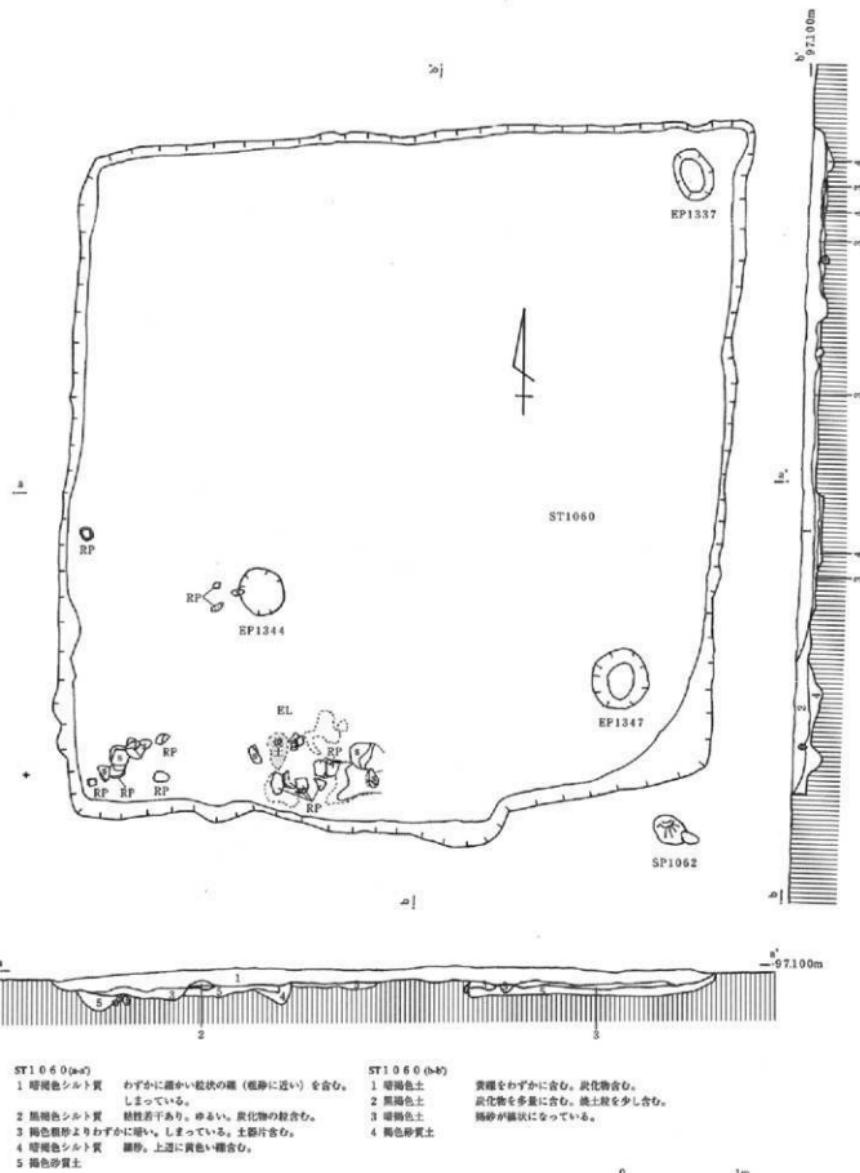
ST380(a-a', b-b')

- 1 黒褐色粘性有砂質土 塗化物土層片
所々に入る。(床面)
2 暗褐色土 所々に黄褐色粘質土
まばらに混る。(土壤の底面)

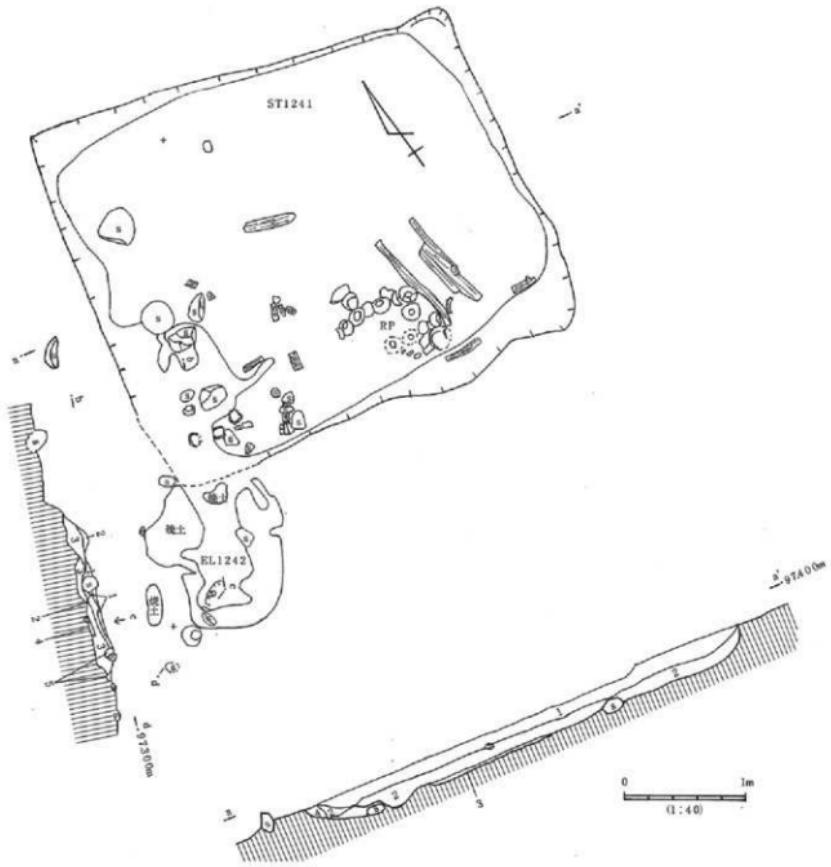


第8図 ST380竪穴住居跡





第10図 ST 1060 竪穴住居跡



EL1242(b-c)

- 1 黄褐色少し粘性のある礫跡。炭化物が大量に混じる。
 - 2 黄褐色の土。
 - 3 黄褐色炭化物層
 - 4 黄褐色炭土
 - 5 黒褐色
- 炭化物が多量に含む。

ST1241(a-a')

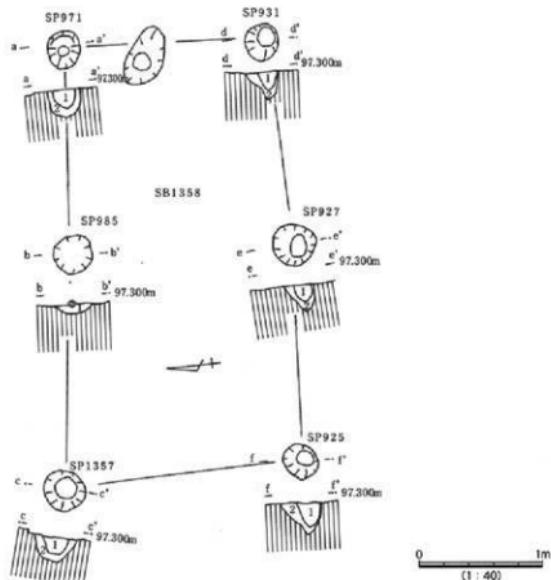
- 1 砂褐色砂質シルト
 - 2 砂褐色砂質シルト
 - 3 砂褐色砂質シルト
 - 4 砂褐色砂質シルト
- 粒状構造を況じる。しまっている。
- 粒状構造し。本片が多く含まれる。ゆるい。
- 粒状構造し。木片が多く含まれる。ゆるい。上層より若干粘性有り。
- 粒状構造わずかに混じる。しまっている。1より少々赤っぽい。

第11図 ST1241竪穴住居跡

3 挖立柱建物跡 (SB)

SB1358 (第12図)

今回の調査で掘立柱建物跡が1棟検出された。調査区の南半部で、(6~8, 48~50)Gに位置し、ST1241の南側である。1間×2間の建物である。古代の竪穴住居跡と同じ方向に向かって東西に長い建物である。柱間は南北、東西とも170~180cmではほぼ等間隔である。



SP971(a-a')

1 帯褐色砂質土
2 帯褐色砂質土
上邊に粒隙を含む。遺物無し。試片わずかに含む。ゆるい。
わざかに粒隙含む。下層は地山の赤っぽい土混じる。

SP985(b-b')

1 帯褐色砂質土
プロック状に小石大の膠泥じる。少ししまる。

SP1357(c-c')

1 帯褐色砂質土
2 带褐色砂質土
根分枝隙含む。しまりあり。下層よりやや黒っぽい。
中位より下邊に赤っぽい地山土混じる。下部に土壠片粒疊じ
る。

SP931(d-d')

1 帯褐色砂質土
2 带褐色砂質土
上邊に粒隙含む。遺物無し。少ししまっている。下層よりやや
黒っぽい。

SP927(e-e')

1 帯褐色砂質土
2 带褐色砂質土
わざかに粒隙含む。遺物無し。少ししまっている。下層よりや
や黒っぽい。

SP925(f-f')

1 带褐色砂質土
2 带褐色砂質土
上邊にわざかに粒隙含む。少ししまりあり。下層よりもやや黒
っぽい。
わざかに粒隙含む。下層壁面にかけて、地山の砂質土混じる。

第12図 SB1358掘立柱建物跡

4 土壙 (SK)

縄文時代の土壙が数基確認されているが、以下は墓壙と思われるものを含めて主なものについて記述する。

SK 28 (第13図)

調査区の北半部北東で(34, 20)G内に検出された。土壙とは物を貯蔵したり、ゴミ捨て場として地面に掘った穴などを言うが、これは、直径が約140cmの土器の廃棄壙と思われる。土器の堆積層は薄く、また土器の上半部がそっくり削り取られており、開田事業の際の工事による影響があるものと思われる。

SK 147 (第14図)

調査区の北半部西側で(26, 20)Gに検出された土壙である。土器の堆積層も薄く、長径約170cmで2つの穴が連続するような形で確認された。深さは約30cm程度で、土壙の上面と中位面から焼土層もみられた。土器片が多数出土し、縄文時代の晩期から終末期のものと考えられる。

墓壙群 (第15図)

調査区の中央部北側、(20~22, 30~32)Gにかけて、墓壙と考えられる遺構を検出した。ただし、開田事業時に地山まで削り取られ、墓壙の底の部分だけが残されたよう検出された。

SK 904は長径が93cm、短径が53cmの不整楕円形状である。深さは10cmと浅く、ベンガラ(赤色の顔料・朱)を塗った痕跡はなかったが、ヒスイ製等の小玉数個とかけら、さらに土器小片が検出された。

SK 906は、SK 904のすぐ西側で検出された。一部削られて明確でない部分もあるが、長軸で約250cmと大きい。確認面からの深さは15~20cmである。石錠が4点、土器片が多数出土しており、墓壙というより大きな土壙といえる。

SK 907は、墓壙群の一番東側から検出され、長径115cm、短径73cmの不整楕円形をしている。深さは10cmである。朱が3カ所にそれぞれ塗られており、他にも掘り込みがあるため、数基が重なり合っていると考えられる。その中の1カ所から複数の小玉と土器小片が検出された。

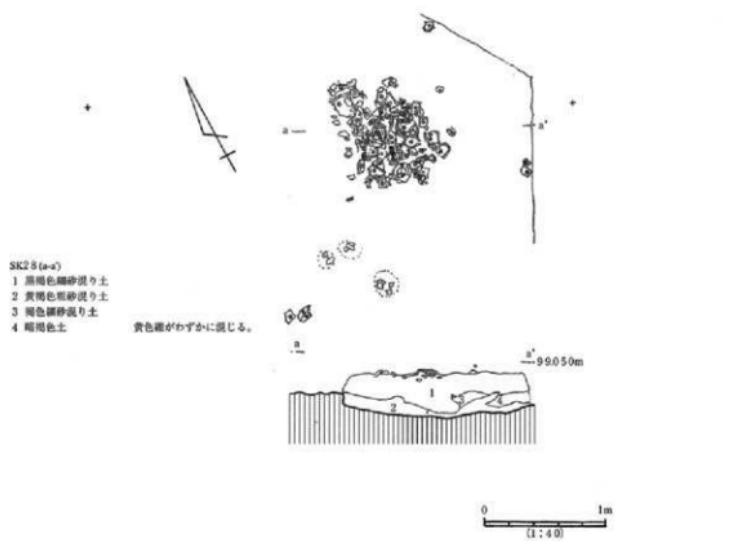
SK 914は、SK 907のすぐ西側、SK 904のすぐ北側で検出された。長径136cm、短径75cmの不整楕円形で深さは8cmと深い。深さ3~5cmより朱が検出された。

SK 916は一番南側から検出され、長径210cm、短径70cmの不整楕円形で深さは14cmである。若干朱が上面に混じっているがはっきりしない。

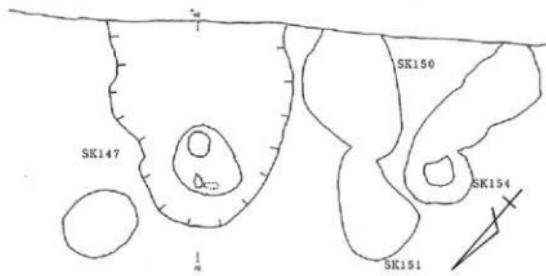
5 溝跡 (SD)

SD 300は調査区北半部より検出され、南側に開いた馬蹄形をしている。東側で一部ST 130に切り取られている。溝幅は40~50cm、深さ20cm前後で、出土遺物

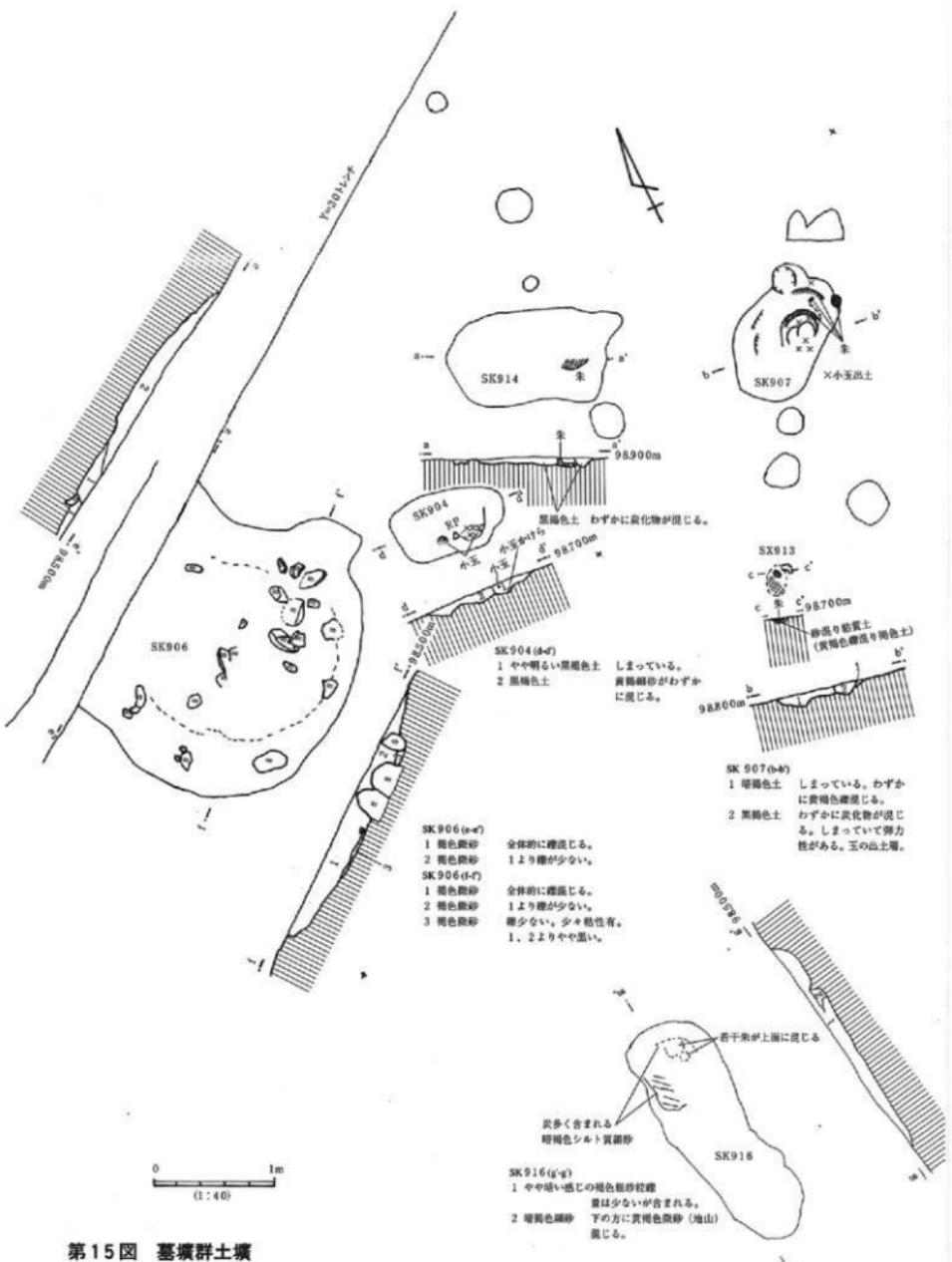
から縄文時代に属するものと思われる。南半部からは、約10~13mの間隔で北西から南東に並行する2本の溝跡を検出した。西側のSD923、東側のSD1145で幅は約30~50cmである。



第13図 SK2 8土壤



第14図 SK147土壤



第15図 墓壙群土壤

IV 出土した遺物

今回出土した遺物は整理箱で約120箱で、そのほとんどが縄文土器である。他に須恵器、赤焼土器、石器類などである。うち縄文土器は破片が大半を占め、完形品はほとんどない。また、復元可能なものも極めて少ない。

1 縄文土器

大部分が日常の生活で使用した深鉢などの粗製土器である。小さな破片が大半で、接合し復元できるものはほとんどない。また、遺構がらみの出土が少なく、グリッド毎の表土や包含層直上などからの出土が多い。

時代的には約2,600～2,400年前、縄文時代晩期後葉、亀ヶ岡式土器に属する大洞A-A'式期の土器片の類が多く出土している。文様が「工」の字に似ている工字文、あるいは変形工字文の壺や鉢、また綾杉文と呼ばれる「>>>」のような文様の土器片、口縁部に二つの突起のある浅鉢と思われる土器などが出土しているのがこの遺跡の特徴と言える。

2 弥生土器

はっきりと断定できる弥生時代の土器については、明らかにできなかつたというのが実状である。弥生時代と思われる小型壺や刷毛目文の土器片など、数点が検出されているが特定までに至っていない。

3 古代の遺物

竪穴住居跡を中心に須恵器や赤焼土器が出土した。須恵器は貯蔵用の壺や甕、食器の壺、壺などで、赤焼土器は主に壺で小型の甕も出土している。ST1241からは、ほぼ完形の須恵器の壺を含め、壺や甕、赤焼土器の壺など数点が伏せられた状態でまとまって出土した。またST1173からは、底部に「生」と書かれた墨書きの須恵器が出土した。底部は回転糸切りが主で、他にヘラ切りも見受けられる。ST1060からは底部ヘラ切りの須恵器が出土しており、時代が遡ると思われる。その他に三脚付皿のような黒色の土器で、「保」と書かれた土器も一点出土している。

4 土偶・土製品

土偶の出土は完形ではなく、土偶の一部分と思われるものを含めて数点である。土偶頭部と思われる破片は、半円状で髪型を表現しているように見える。また、長径4.4cmのほぼ丸い円で目、口、鼻のある顔を表現していると思われるものも出土した。土版では、四方に髪型の連続した刻みがあり、中央部に鋸歯文の横帯がある文様のものも出土した。

5 小玉及びその他の出土遺物

調査区の中央より少し北東側の墓壙群から、ヒスイ製の小玉1点と緑色の軟石製の玉が数十点（破片を含む）出土した。玉は大きいもので直径9mm、小さいもので直径4mmと大小様々である。紐を通したと思われる穴が開けられており、形も整ったものもあれば少し変形したものもある。出土した時は水を含んでおり、指先で潰せる程軟らかく、鮮や

かな緑色をしていた。

また、この墓壙群より南（16, 50）Gで、削平され攪乱している地山の上から単独でヒスイ製の小玉1点が出土した。直径1.4cm、厚さ1.0cm、内径4mmと大きいものである。他に鉄製品や古錢も数点ずつ出土している。

6 石器・石製品

・石鎌

今回出土した石器の中で一番多かったのが石鎌で、60点を確認できた。石器の材料となつた石の多くは黄褐色や黒っぽい頁岩で、石鎌には赤い頁岩、淡い色の黒曜石、石英などがみられる。形態は付け根に柄に装着するための突起のある形で、一部茎がはっきりしないものもあるが、茎のあるものがほとんどである。茎のないものは確認できなかった。先が鋭く尖ったタイプと少々すんぐりしたタイプがあり、完全な形で出土しているものが多い。

また、茎の部分が細くなく、付け根の部分が左右に開いているアメリカ型といわれる石鎌や、長さが11mmの小さい石鎌なども出土している。

・石槍

先端の尖った槍先形の石器で尖頭器ともいう。10点の出土を確認した。

・石錐

石製の錐であり、骨角器・石製品などに穿孔するための工具である。頭部が大きく錐部が短いものや、錐部が非常に細長いものなど9点が出土している。

・石匙

つまみ状の小突起をもつていて、横型と縦型とがある。今回の調査では3点出土しており、いずれも横型である。

・石箆

箆状の形態をし、剥片の背面と主要剥離面の両面に加工され、長軸の末端が刃部となる石器である。石鎌の次に出土数が多く22点を確認した。

・磨製石斧

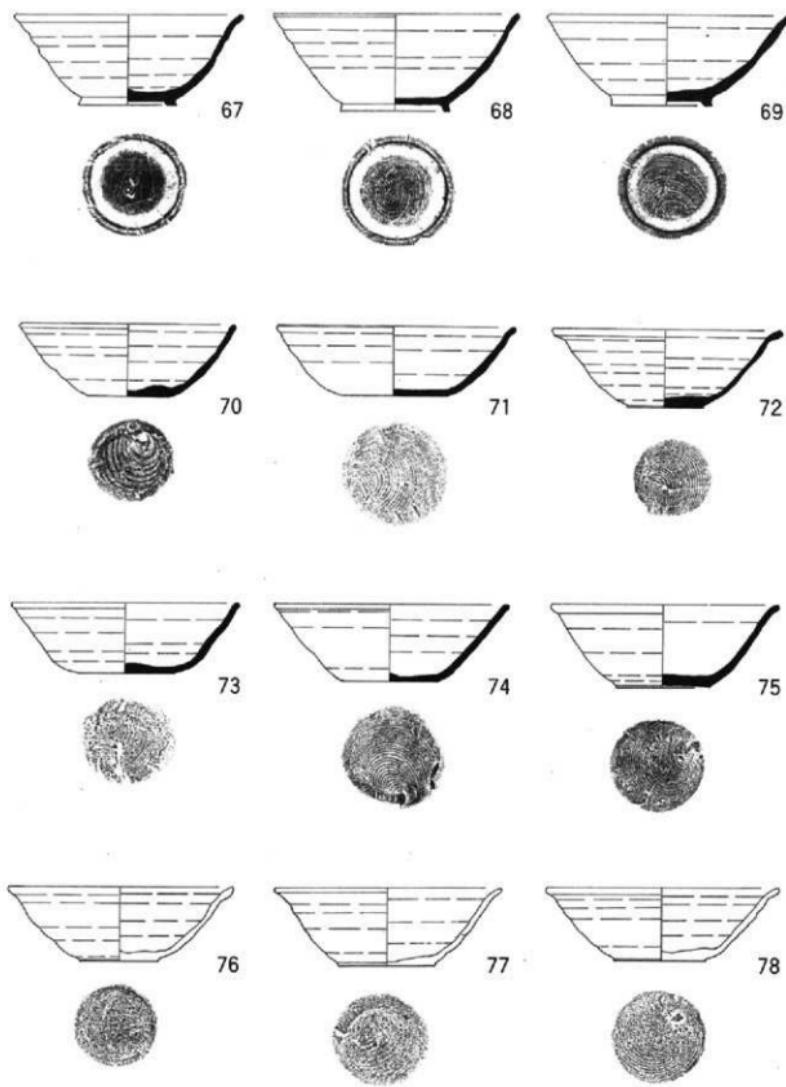
17点の出土が認められた。

・石棒

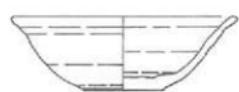
全部で8点の出土を確認した。一部が欠けているものの、長さが363mmと長い石棒が2つに折れた状況で出土した。

・その他の石器・石製品

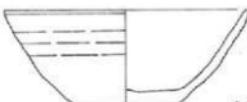
今回の調査では、石冠、石鏡、独巣石など特異な形や祭祀に係わると思われる用途不明の石製品の出土も数点確認された。



第16図 ST1 2 4 1出土遺物
 (1 : 3)



79



80



81



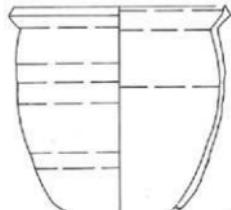
82



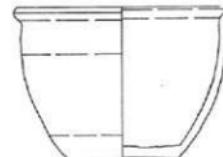
83



84



85



86



87



88



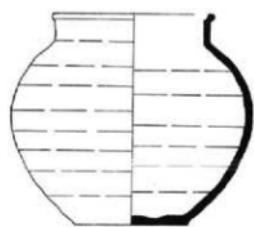
89



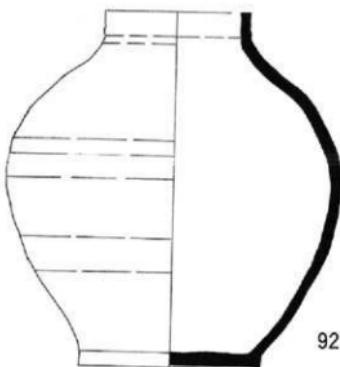
90

 0 10mm
(1 : 30)

第17図 ST1241・ST1173出土遺物



91



92



93



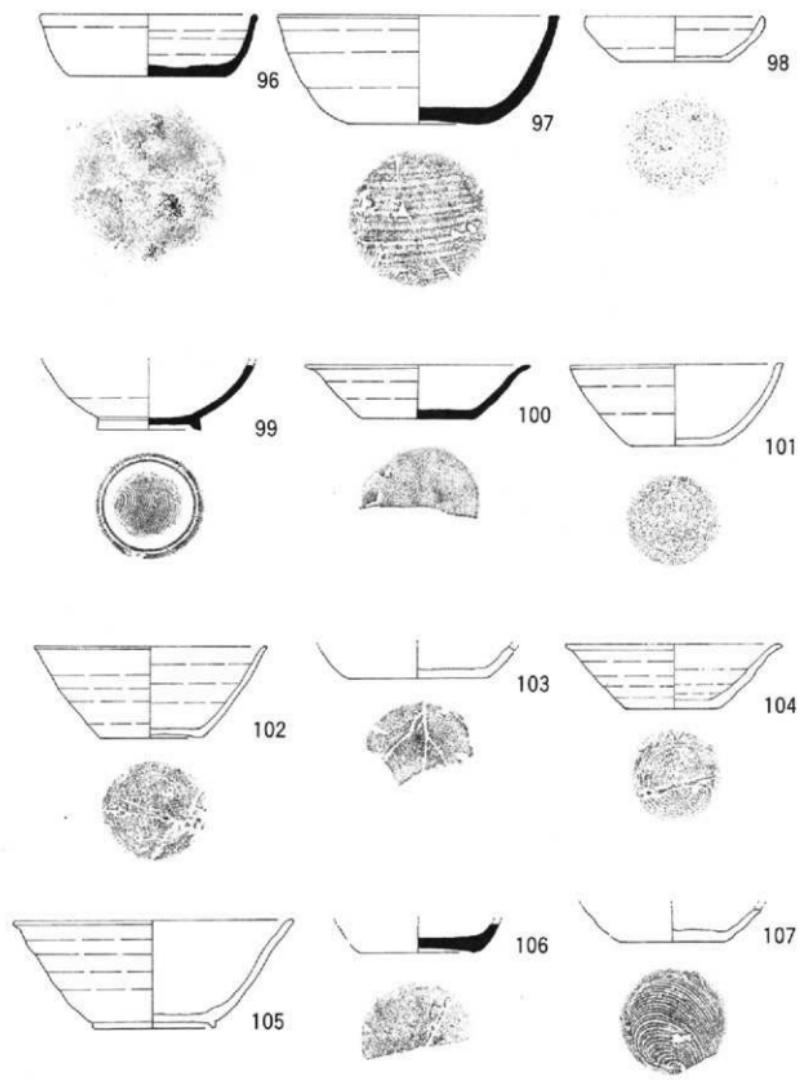
94



95

A scale bar at the bottom right of the figure, labeled '0' at the left end and '10mm' at the right end, with a ratio of '(1:3)' written above it.

第18図 ST1241・ST105出土遺物



第19図 ST1060・ST380・ST130・ST105出土遺物

表-1 出土遺物一覧表(1)

No	種類	器種	出土地点	寸法(mm)			備考	No	種類	器種	出土地点	寸法(mm)			備考
				口径	底径	厚さ						口径	底径	厚さ	
1	縄文	高環	SK28		57	79		33	縄文	深鉢	(10.58)GⅢF	115	297	口縁～底部	RP447
2	縄文	ミニチュア	SK28	15	36	58		34	縄文	深鉢	(30.20)G	77	155	体部～底部	
3	縄文	深鉢	SK28		48		鉢昂～底延小型	35	縄文	小盤鉢	(10.52)GⅢF	48	52	98	RP417
4	縄文	深鉢	SK28	60	127		口縁～底部 小型	36	縄文	小盤鉢	SP1062	94	35	85	
5	縄文	碗	SK28		50			37	縄文	浅鉢	(10.58)G	163	83	73	RP456
6	縄文	深鉢	SK28		75		底部	38	縄文	盤	(12.60)GⅢ	77			RP400
7	縄文	深鉢	SK28				体部	39	縄文	鉢	(10.50)GⅢ下				RP420
8	縄文	深鉢	SK28				体部	40	縄文	鉢	(34.22)GSK119	87			体部～底部
9	縄文	深鉢	SK28				口縁	41	縄文	鉢	(34.20)G 地直				底部縦彫文工字文 RP103
10	縄文	鉢	SK28				口縁	42	縄文	鉢	(34.20)G 地直				口縁 縞文杉工字 RP104
11	縄文	鉢	SK28				口縁	43	縄文	鉢	(26.20)G Ⅲ				口縁 黒色磨きあり RP85
12	縄文	裏覆土器片	SK28					44	縄文	深鉢	(34.18)G				口縁 RP37
13	縄文	鉢	SK147				口縁	45	縄文	台付浅鉢	(34.22)G Ⅲ				台部 RP70
14	縄文	鉢	SK147				口縁 变形工字文	46	縄文	台付浅鉢	(10.52)GSK1184				台部 RP443
15	縄文	鉢	SK147				口縁～体部	47	縄文	深鉢	(34.22)G Ⅲ	57			底部 小型 RP50
16	縄文	鉢	SK147				体部	48	縄文	深鉢	(34.20)G 地直	69			RP95
17	縄文	鉢	SK147				口縁～腹部 刺突文	49	縄文	深鉢	(8.52)G SK1256	91			底部 木葉痕
18	縄文	土器片	SK904		4片			50	縄文	鉢	(10.52)G Ⅲ	68			口縁～底部
19	小玉		SK904				口縁	51	縄文	四脚付土器	(8.54)G SK953F				底部
20	小玉		SK904				口縁	52	縄文	壺	(34.20)G 地直				口縁・工字文乳孔 RP102
21	縄文	土器片	SK907		3片			53	縄文	深鉢	(6.52)G				体部 くし書き
22	小玉		SK907				軌道式 完形62個、他破片多数 大直径2mm厚2mm?2.5mm 小直径1mm厚1.5~2mm?1.5mm	54	縄文	壺	(12.50)G				
23	小玉			(16.50)G				55	縄文	裏覆土器片	(34.18)G				RP42
24	縄文	鉢	SK906				口縁	56	縄文	浅鉢	(8.52)G SK1256				口縁
25	縄文	鉢	SK906				口縁	57	縄文	壺	(12.46)G				穿孔あり RP437
26	縄文	深鉢	SK906				底部	58	縄文	壺	(12.52)G				口縁 縞文中期
27	縄文	深鉢	EL997				口縁～体部	59	縄文	ミニチュア	(8.52)G	36	57		RP352
28	縄文	深鉢	(10.52)GSK137	126	72	181	小型	60	土偶	(8.50)G Ⅲ下				頭	RP366
29	縄文	深鉢	(10.52)GSK134	119	85	155	小型	61	土偶	(10.20)G SK127				胸部	RP243
30	縄文	鉢	(10.52)GSK134	92	150		口縁～底部	62	土偶	(30.22)G Ⅲ				壁型	RP65
31	縄文	深鉢	(10.52)GSK137		125		底部欠口縁～底部	63	土瓶片	(26.20)G Ⅲ下				No54と接合	RP75
32	縄文	深鉢	(10.52)GSK137	125	106			64	土瓶片	(24.20)G Ⅲ下				No53と接合	RP87
								65	土瓶片	(22.28)G SK425F					RP109
								66	瓶状點	(24.28)G Ⅲ上					RP66

表-2 出土遺物一覧表(2)

No	種類	器種	出土地点	測定値(cm)			備考
				口径	底径	脚高	
67	須恵器	高台付坏	ST1241	145	65	58	完形 RP10
68	須恵器	高台付坏	ST1241	150	69	58	RP11
69	須恵器	高台付坏	ST1241	150	65	57	RP16
70	須恵器	坏	ST1241	135	50	42	完形 RP2
71	須恵器	坏	ST1241	150	65	45	完形 RP8
72	須恵器	坏	ST1241	140	48	48	完形 RP9
73	須恵器	坏	ST1241	145	55	45	RP20
74	須恵器	坏	ST1241	148	60	48	RP21
75	須恵器	坏	ST1241	142	58	50	RP22
76	赤燒	坏	ST1241	140	50	45	完形 RP3
77	赤燒	坏	ST1241	140	60	48	完形 RP4
78	赤燒	坏	ST1241	145	58	45	RP14
79	赤燒	坏	ST1241	142	50	45	RP25
80	赤燒	坏	ST1241	153	65	60	RP24
81	赤燒	碗	ST1241	118	70	52	RP17
82	赤燒	坏	ST1241	145	55	45	RP6
83	赤燒	坏	ST1241	135	—	58	底部斜め RP7
84	土師器	坏	ST1241	—	62	—	内黒 RP28
85	赤燒	壺	ST1173	135	—	125	底部欠 RP4
86	赤燒	壺	ST1241	—	70	93	RP15
87	赤燒	壺	ST1241	128	65	102	RP26
88	須恵器	坏	ST1173	142	60	40	完形 RP7
89	須恵器	坏	ST1173	146	55	43	底部に「生」墨書 RP3
90	須恵器	坏	ST1173	140	60	35	RP5
91	須恵器	壺	ST1241	100	70	130	RP12
92	須恵器	壺	ST1241	93	120	220	RP5
93	須恵器	壺	ST1241	—	100	—	RP19
94	須恵器	壺	ST1241	—	90	—	RP23
95	須恵器	壺	ST105	—	—	—	RP175
96	須恵器	坏	ST1060	135	100	37	RP3
97	須恵器	坏	ST1060	—	90	67	RP5(=7)
98	赤燒	小皿	ST1060	110	70	27	完形 RP1
99	須恵器	高台付坏	ST380	—	67	—	RP126
100	須恵器	坏	ST130	—	70	33	RP214
101	赤燒	坏	ST1060	132	57	50	980901Sベルト上イ
102	赤燒	坏	ST380	145	65	57	RP124
103	土師器	坏	ST130	—	—	—	底部素模 木葉痕 RP193
104	赤燒	坏	ST1060	134	57	40	980901Sベルト上口
105	赤燒	坏	ST380	—	75	67	RP114
106	須恵器	坏	ST105	—	70	—	底部 RP184
107	赤燒	坏	ST105	—	65	—	底部 RP185
108	須恵器	両耳坏	(4,54)GⅢ	—	—	—	RP397
109	硯片		ST380	—	—	15	RP244
110	黒色土器	皿	(8,52)G	—	—	—	三脚付皿「保」と書かれる
111	赤燒	壺	ST380	—	—	—	口縁～体部 RP129
112	須恵器	カ	(10,54)G	—	—	—	焼成は須恵器、文様は繩文？

表一 3 石器・石製品一覧表

No	器種	出土地点	寸法(cm)			備考	No	器種	出土地点	寸法(cm)			備考	
			長さ	幅	厚さ					長さ	幅	厚さ		
1	石 鋸	(32,22)G	18	12	5	先端部	RQ2	41	石 鋸	(12,56)G	32	13	5	
2	石 鋸	(30,20)GⅢ	27	12	10		RQ23	42	石 鋸	(12,52)G	33	15	8	
3	石 鋸	(34,18)GⅡ下	36	12	9		RQ32	43	石 鋸	(10,50)G	24	11	5	
4	石 鋸	(36,20)GⅡ下	29	10	8		RQ33	44	石 鋸	(8,48)G	31	15	6	
5	石 鋸	(36,20)GⅡ下	18	10	6			45	石 鋸	(5,46)G	21	11	7	
6	石 鋸	(34,18)GⅡ下	20	9	5		RQ34	46	石 鋸	(10,56)G	20	11	4	
7	石 鋸	(34,14)GⅡ下	22	13	6		RQ40	47	石 鋸	(10,58)G	19	13	5	
8	石 鋸	(30,20)GⅢ	32	12	8		RQ66	48	石 鋸	(14,54)G	25	11	4	
9	石 鋸	(26,20)GⅢ上	22	13	6		RQ72	49	石 鋸	(6,50)G	26	15	6	
10	石 鋸	(28,18)GⅢ上	29	16	9		RQ73	50	石 鋸	(8,54)GⅢ下	27	8	3	RQ391
11	石 鋸	(22,22)GⅢ下	22	14	6		RQ74	51	石 鋸	(14,58)G耕作土	36	15	5	RQ310
12	石 鋸	(26,20)GⅢ	34	12	4		RQ79	52	石 鋸	(8,54)G SD923	36	13	7	RQ395
13	石 鋸	(28,20)GⅢ	31	14	3		RQ80	53	石 鋸	SK905	38	12	4	
14	石 鋸	(26,18)GⅢ	30	11	5			54	石 鋸	SK905	25	7	4	
15	石 鋸	(26,22)GⅢ下	44	14	6		RQ88	55	石 鋸	SK905 S側	20	11	5	
16	石 鋸	(26,22)GⅢ下	33	12	6		RQ89	56	石 鋸	SK905	23	14	5	
17	石 鋸	(16,28)G埋土	26	12	6		RQ93	57	石 鋸	X-0	27	13	6	RQ98
18	石 鋸	(32,20)G地山	30	14	6		RQ94	58	石 鋸	X-0	29	12	6	
19	石 鋸	(34,20)G地山	20	10	4		RQ96	59	石 鋸	X-0	43	13	6	
20	石 鋸	(6,42)G表土	28	13	7		RQ303	60	石 鋸	X-0	26	10	4	
21	石 鋸	(6,42)G表土	27	15	8		RQ304	61	石 植	(32,20)G	40	19	10	RQ97
22	石 鋸	(6,42)G表土	35	12	5		RQ305	62	石 植	(26,28)G	40	11	8	RQ106
23	石 鋸	(6,46)G表土	35	15	4		RQ308	63	石 植	(6,46)G	50	17	10	
24	石 鋸	(12,36)G耕作下	30	12	4		RQ309	64	石 植	(10,52)G	49	13	3	
25	石 鋸	(16,44)G耕中	16	9	3		RQ311	65	石 植	(8,54)GⅢ下	39	26	8	RQ398
26	石 鋸	(12,48)GⅡ下	42	15	5		RQ318	66	石 植	(10,50)GⅢ下	55	27	8	RQ419
27	石 鋸	(10,52)GⅡ下	32	12	7		RQ326	67	石 植	(24,20)GⅡ	41	27	11	スクレーバー RQ4
28	石 鋸	(10,60)GⅢ上	64	37	12		RQ373	68	石 植	SK914	40	18	7	
29	石 鋸	(12,58)GⅢ上	27	10	7		RQ375	69	石 植	SK28E側P中	70	17	13	RQ237
30	石 鋸	(8,50)GⅢ上	24	12	6		RQ379	70	石 植	(4,56)G SK1088	23	16	4	RQ463
31	石 鋸	(4,50)GⅢ上	27	13	6		RQ380	71	石 鋸	(8,48)GⅢ上	40	7	5	RQ381
32	石 鋸	(4,54)GⅢ下	24	14	5		RQ385	72	石 鋸	(28,16)GⅢ	26	16	5	RQ239
33	石 鋸	(4,54)GⅢ下	24	12	4		RQ387	73	石 鋸	(10,52)GⅢ	28	35	9	RQ327
34	石 鋸	(4,52)GⅢ下	33	13	6		RQ388	74	石 鋸	(10,58)GⅢ上	60	14	5	RQ328
35	石 鋸	(8,56)GF	41	9	4		RQ393	75	石 鋸	(6,46)GⅢ下	35	22	4	RQ433
36	石 鋸	(8,56)GF	25	7	8		RQ394	76	石 鋸	(6,56)GF	38	23	13	RQ392
37	石 鋸	(6,56)GⅢ下	36	11	6		RQ396	77	石 鋸	(36,14)G SK58	38	37	14	RQ99
38	石 鋸	(8,60)G	40	12	8			78	石 鋸	X-0	56	18	8	
39	石 鋸	(4,54)G	25	13	7			79	石 鋸	X-0	39	23	7	
40	石 鋸	(12,52)G	21	12	7			80	石 匙	(36,12)GⅢ	75	66	17	RQ48

表-3 石器・石製品一覧表

No.	器種	出土地点	寸法(cm)			備考	No.	器種	出土地点	寸法(cm)			備考
			長さ	幅	厚さ					長さ	幅	厚さ	
81	石 鏁	(12.52)GⅡ下	46	65	11	RQ320	118	磨 斧	(4.60)G	71	38	31	
82	石 鏁	ST130 EP232	43	56	7	RQ233	119	磨 斧	(8.54)GⅢ下	74	62	36	柄 RQ449
83	石 斧	(8.50)GⅢ下	31	11	5	RQ384	120	磨斧片	(24.20)G SP617	49	42	26	RQ101
84	石 斧	(30.10)GⅡ	66	33	15	RQ3	121	磨 斧	SK906	132	48	28	
85	石 斧	(32.18)GⅢ上	48	21	11	RQ43	122	石 鑿	(10.56)GⅢ上	363	30	23	RQ329
86	石 斧	(30.12)GⅢ	62	31	16	RQ44	123	石 楔片	(12.58)GⅢ下	105	31	25	RQ404
87	石 斧	(34.22)GⅢ直上	50	19	9 小型	RQ46	124	石 楔片	(12.58)GⅢ下	60	38	38 頭部	RQ406
88	石 斧	(30.12)GⅢ	60	38	15	RQ47	125	石 楔片	(26.24)G	67	45	35	RQ108
89	石 斧	(18.28)G埋土	46	23	12	RQ240	126	石 楔片	(10.48)GⅢ下	141	30	21	RQ428
90	石 斧	(14.46)G砂礫中	60	25	14	RQ316	127	石 楔片	(12.58)G	41	33	32	
91	石 斧	(14.48)G砂礫中	72	33	13	RQ317	128	石 楔片	(12.60)G	56	42	42	
92	石 斧	(10.60)GⅢ	70	32	15	RQ402	129	石 楔片	(10.50)GⅣ直上	130	35	37	RQ425
93	石 斧	(6.52)G	57	24	8		130	磨製石製品	(6.46)GⅢ下	63	23	14	RQ432
94	石 斧	(10.56)G	80	31	18		131	磨製石製品	(18.28)G 埋土	100	55	23	RQ92
95	石 斧	(10.46)G	59	37	9		132	磨製石製品	(4.58)GⅢ下	37	40	12	RQ448
96	石 斧	(6.48)GⅢ下	95	36	26	RQ454	133	磨製石製品	(6.52)G 枕北	107	99	36	RQ456
97	石 斧	(12.56)GⅢ下	66	32	12	RQ464	134	石 瓶	(12.52)GⅡ下	64	91	43	RQ323
98	石 斧	SK28W側P中	63	24	12	RQ238	135	石 鑿	(12.50)GⅢ下	85	67	41	RQ410
99	石 斧	SK978F	80	31	14	RQ451	136	石 鑿	(12.58)GⅣ直上	140	55	35	RQ424
100	石 斧	(8.50)G SK964NW	66	35	18	RQ462	137	石 鑿	(8.44)G	91	55	22	
101	石 斧	X-0	85	39	15		138	石 鑿	(10.56)G	55	49	24	
102	石 斧	X-0	74	29	14		139	鉄鉈	(10.50)GⅢ上	66	43	27	RQ325
103	石 斧	X-0	61	29	13	RQ1	140	鐵 石	X=10~11.5,Y=50.52	92	61	50	RQ455
104	石 斧片	X-0	44	22	16	RQ69	141	磨 石	(10.50)GⅢ下	89	86	50	RQ412
105	磨 斧	(10.48)GⅡ下	93	50	31	RQ319	142	打 斧	(12.52)GⅡ下	70	47	31	RQ322
106	磨 斧	(10.46)GⅢ下	87	50	33	RQ429	143	石 製品	(12.58)GⅢ上	134	62	27	RQ331
107	磨 斧	(28.22)GⅢ下	97	54	33	RQ90	144	石 製品	(12.50)GⅢ下	85	62	45	RQ411
108	磨 斧	(12.50)GⅡ下	90	38	14 柄	RQ324	145	石 製品	(10.52)G	132	40	38	
109	磨 斧	(10.56)GⅢ上	105	50	35 柄	RQ330	146	石 製品	(8.44)G	68	65	50	
110	磨 斧	(8.44)GⅢ下	118	50	37 柄	RQ426	147	石 製品	(32.12)GⅢ上	136	75	21	RQ45
111	磨 斧	(6.54)GⅢ下	72	45	40 柄	RQ399	148	石 製品	(34.22)GⅢ	66	92	14	RQ51
112	磨 斧	(14.54)GⅢ下	31	32	13 刀部先部	RQ434	149	石 製品	(30.26)GⅢ	126	45	21	RQ64
113	磨斧片	(28.18)GⅢ	77	51	33 雉部	RQ81	150	石 製品	(8.46)G	103	95	69	RQ436
114	磨 斧	(14.36)G	40	37	20		151	石 製品	(34.22)G	88	37	19	RQ68
115	磨 斧	(12.58)G	41	35	12		152	石 製品	SK978F	142	66	38	RQ452
116	磨 斧	(6.48)G	116	53	27		153	石 製品	X-0	115	105	100	
117	磨 斧	(8.44)G	120	55	35								

V まとめ

花ノ木遺跡は、法師川左岸の自然堤防、微高地上に立地している。今回の調査は、工業団地造成事業に伴う緊急発掘調査である。調査面積は $2,971.1\text{m}^2$ で、平成9年度と平成10年度の2か年にわたって現地調査を実施した。その結果、開田事業において遺構上面が一部破壊された部分もあったが、古代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土壙、溝跡等が検出された。出土遺物は整理箱で約120箱を数え、そのほとんどが縄文土器であるが、の中には完形な土器や復元可能な土器はほとんどなく破片が大半を占めた。

本遺跡の時期は、これまで縄文時代晚期～弥生時代初頭と言われてきたように、出土した遺物などから縄文時代晚期終末期の遺跡と言える。今回の調査では弥生時代と考えられる土器片以外に弥生時代のものと特定できる遺物・遺構の出土や検出はされなかった。時代の中心は縄文時代晚期と言えるが、その他にも平安時代に属する竪穴住居跡や須恵器等の出土などから、この時代も集落が形成されていたと言える。

縄文時代の遺構については、ほぼ円形に配置された石組みの配石遺構や、土壙、ピットが検出された。しかし全体的に言えることであるが、明確に良好な状態で検出された遺構はほとんどなく残念である。その中でも、調査区のほぼ中央より北側で検出された土壙は底部に朱を敷いた形跡が認められ、ヒスイ製の小玉や軟石製の玉が数十点出土したことから墓壙ではないかと思われる。ただし、その他の副葬品や供獻品と考えられる遺物の出土はなく、土器の小さな破片数点の出土にとどまった。

竪穴住居跡は全部で6基を確認した。いずれも奈良時代から平安時代のものと考えられる。比較的良好な状態で検出されたのはST1241で、床面からは土圧で潰れてはいたがほぼ完形の須恵器の壺や、植物の種子が入った赤焼土器の小型の甕など数十点がまとまって検出された。縄文時代だけでなく平安時代にも集落を形成していたと言える。

出土した遺物は、破片が大半を占め、器種も特定できないものが多いが、大洞A-A'式期の土器片の類が多く、縄文時代晚期頃の土器と言えよう。弥生時代の土器については、特定できる遺物の出土は確認できなかった。須恵器や赤焼土器は縄文土器に比べてわずかの出土である。その他に小型の鉢やミニチュア壺、ヒスイ製の小玉、呪術的・祭祀的と思われる用途不明の石製品や土偶、土版など、日常生活以外で使用されたと思われる遺物も数多く出土している。

今回の調査に関しては、様々な事情が重なり、不備な点が数多くあったと思われる。報告書も記録集的なものになり、土器の分類など詳細な分析までには至らなかつたのが実状である。しかし、縄文時代晚期～弥生時代初頭及び平安時代の貴重な遺跡であり、また貴重な出土資料であるため、今後の研究や調査に生かされることを願いたいと思う。なお、平成8年度調査で出土した遺物について、弥生時代のものと考えられる壺2点を含め数点を図版として掲載した。

報告書抄録

ふりがな	はなのきいせきはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	花ノ木遺跡発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名	河北町埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第4集							
編集者名	今田史明							
編集機関	河北町教育委員会・河北町埋蔵文化財調査委員会							
所在地	〒999-3511 山形県西村山郡河北町谷地字みどり町3-2 TEL0237-71-1111							
発行年月日	西暦2001年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はなのきいせき 花ノ木遺跡	やまがたけん 山形県 にしむらやまぐん 西村山郡 かほくちょう 河北町 おおあざよしだ 大字吉田 あざはなのき 字花ノ木	06321	448	38度 26分	140度 19分	19970728 ～ 19971211 19980420 ～ 19981028 (現地調査期間)	2971.1	工業団地 造成事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
花ノ木遺跡	集落跡	縄文時代 晩期 平安時代	土壙・墓壙 溝跡 竪穴住居跡 掘立柱建物跡 など	縄文土器・小玉 石器・石製品 土築器 須恵器 赤焼土器 など	・墓壙と考えられる土壙の底部より朱・玉の出土 ・平安時代の住居跡の確認			

図 版



調査区近景（南西から）



調査区北半部南～南半部



グリッド杭設定（南から）



安全祈願式（97年）



現地説明会（98年）



基本層序（東から）



遺構検出状況（西から）



遺構検出状況（西から）

図版2



EL 997検出状況（北から）



ST 105精査状況（東から）



ST 380精査状況（東から）



ST 1173精査状況（北西から）



ST 130精査状況（南西から）



ST 130内EL検出状況（西から）



ST 1060精査状況（北東から）



SB 1358精査状況（北西から）



ST1241遺物出土状況（東から）



ST1241完掘・E L検出状況（南西から）



SK28内土器出土状況（東から）



SK147精査状況（北から）



SK904精査状況（北西から）



SK904遺物出土状況（北西から）



SK907精査状況（南から）



墓壙群全景（北から）

図版 4



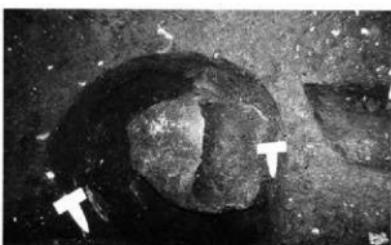
SD300ベルト断面（南西から）



SD923ベルト断面（南から）



深鉢（RP 82）出土状況（北西から）



深鉢（RP 441）出土状況（西から）



小型壺（RP 417）出土状況（西から）



土偶（RP 386）出土状況（北から）

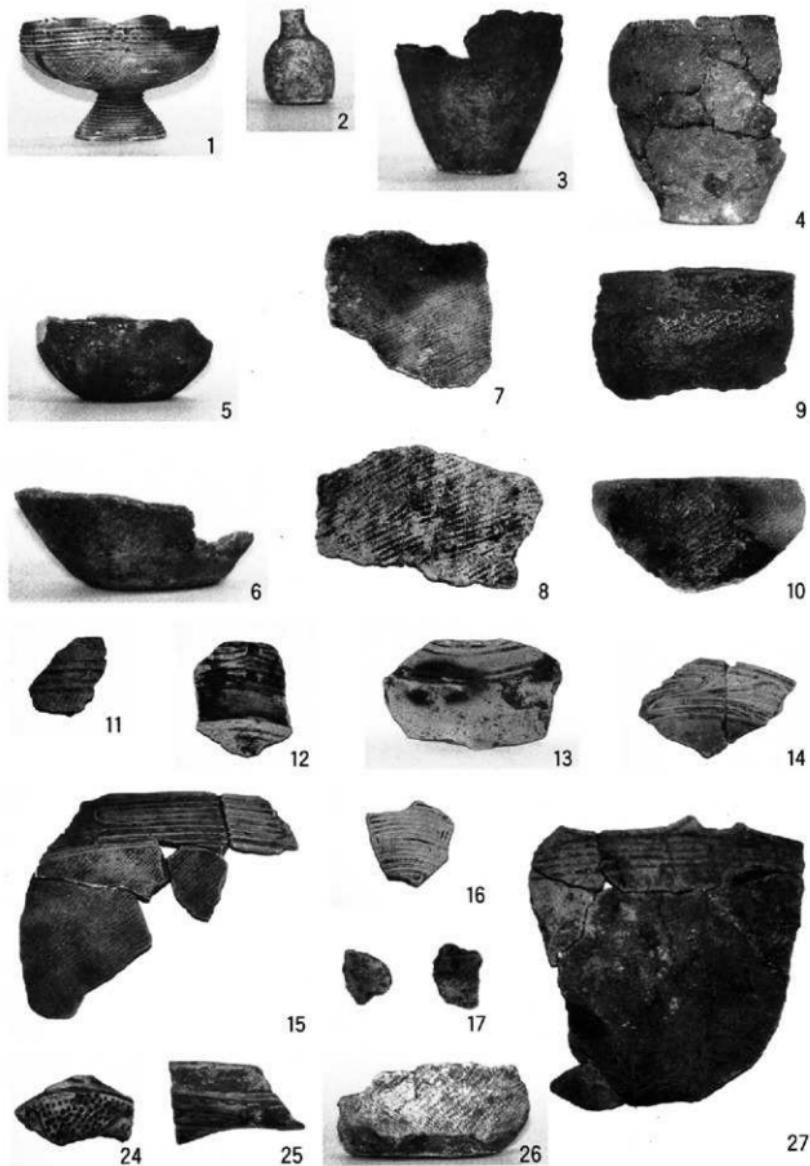


磨製石斧（RQ81）出土状況（南から）

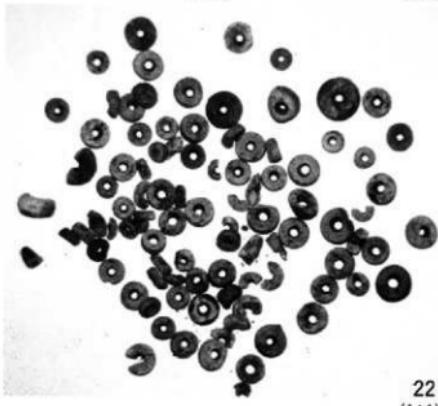
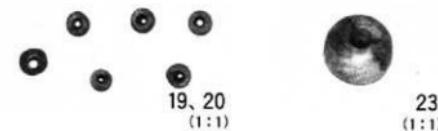


石棒（RQ329）出土状況（東から）

図版 5

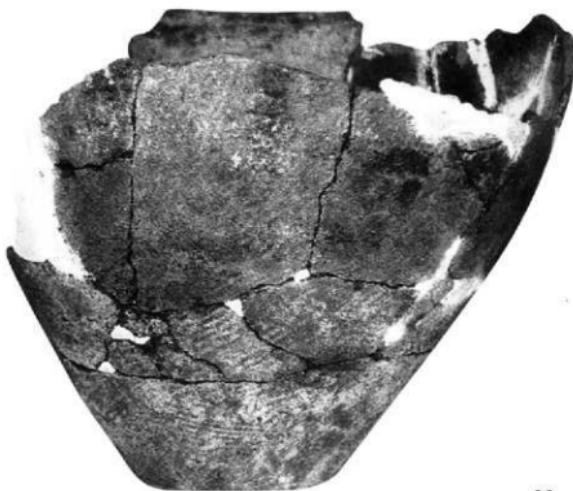


圖版 6



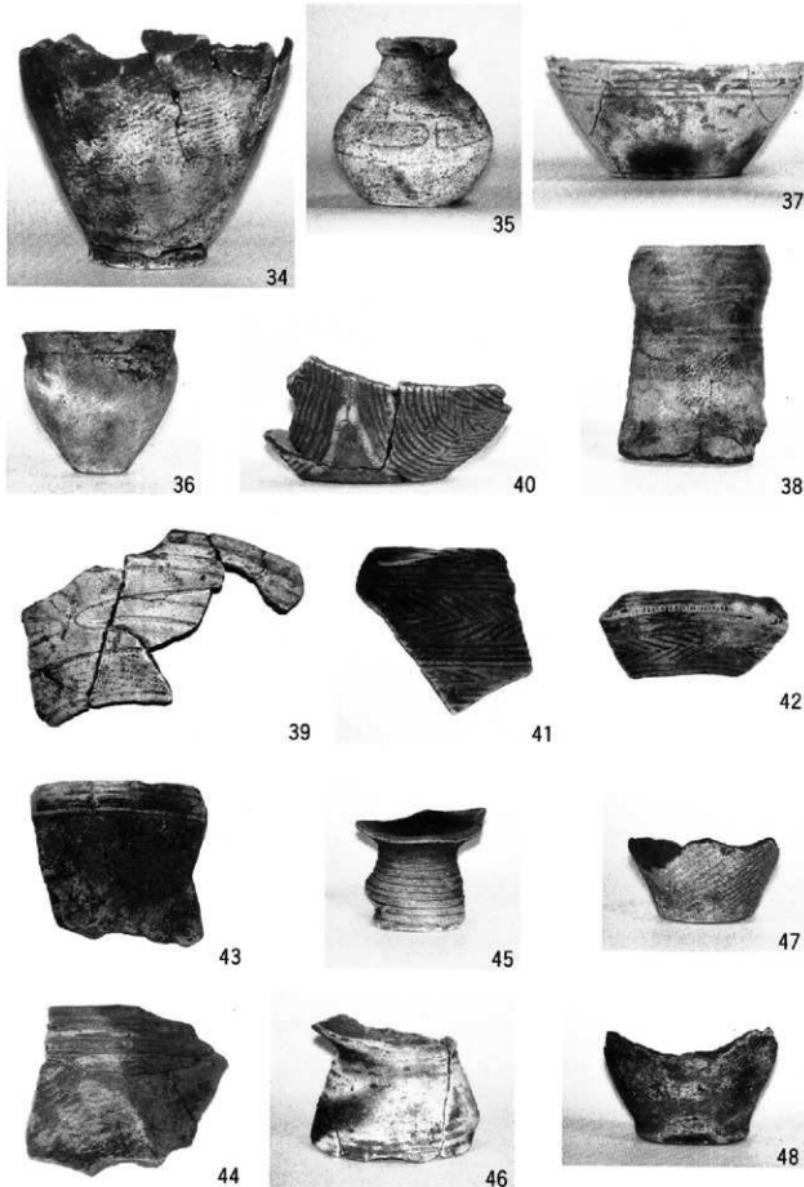


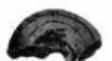
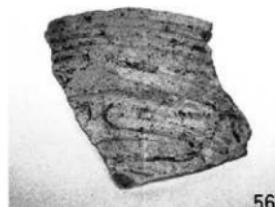
32



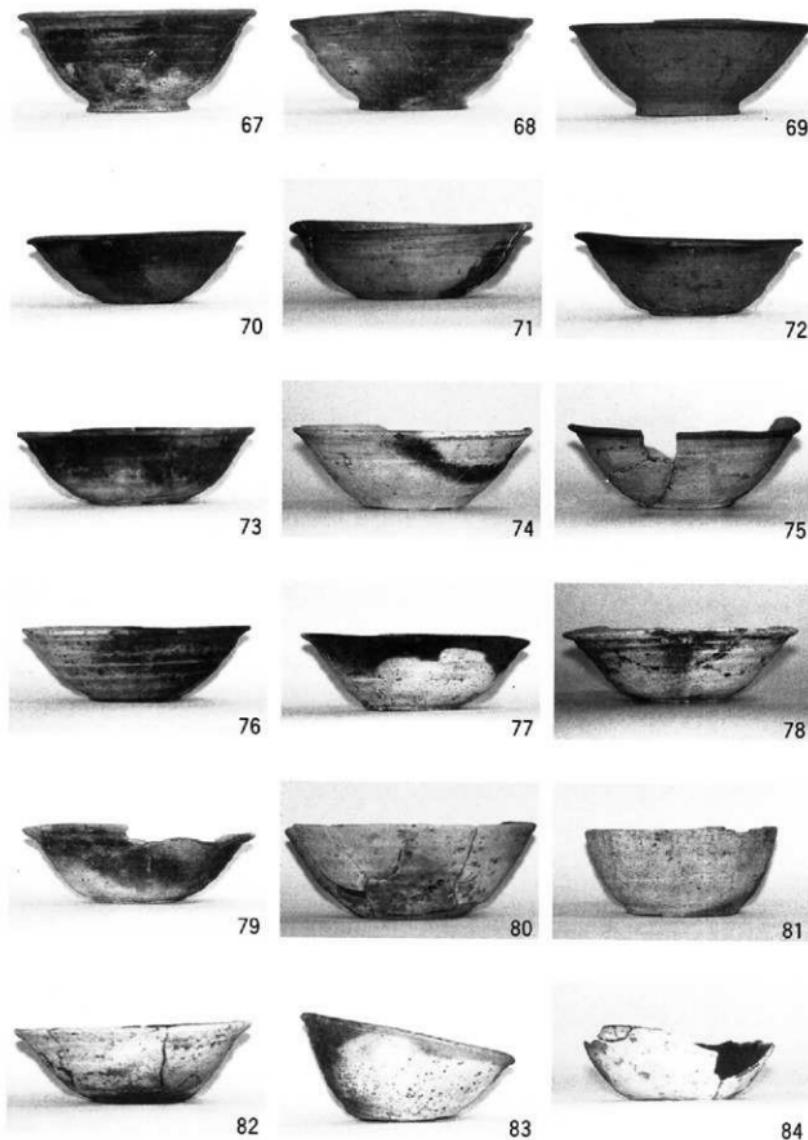
33

圖版 8





圖版 10



図版 11



85



86



87



88



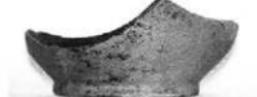
90



89



91



94



93



89

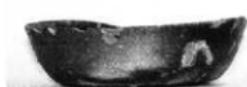


92



95

図版 12



96



97



98



99



100



101



102



103



104



105



106



107



108



109



110



111



石鏃



石槍



石錐



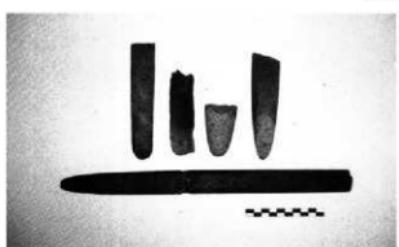
石匙



石鎚



磨斧



石棒



石製品



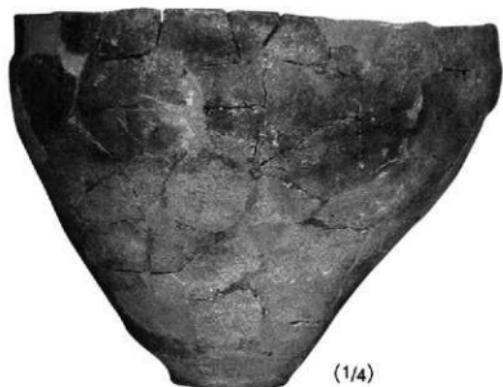
平成 8 年度発掘調査出土遺物 (1)



(1/4)



(1/4)



(1/4)

平成 8 年度発掘調査出土遺物 (2)

図版 16



(1/4)



(1/4)



(1/4)

平成 8 年度発掘調査出土遺物(3)

河北町埋蔵文化財調査報告書 第4集

花ノ木遺跡発掘調査報告書

平成13年3月30日 発行

発行 河北町教育委員会

山形県西村山郡河北町谷地字みどり町3-2

TEL0237-71-1111 FAX0237-71-1110

印刷 田宮印刷 株式会社

山形市立谷川3丁目1410-1

